



(奈良)

奈良・興福寺一乗院跡

1 所在地 奈良市登大路町

2 調査期間 平城第三五〇次調査 二〇〇二年(平14)九月、
十二月

3 発掘機関 奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 代表 金子裕之

5 遺跡の種類 寺院跡

6 遺跡の年代 古代～現代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、平城京左京三条七坊、興福寺旧境内にあり、天禄元年

(九七〇)頃に創建された同寺の院家一乗院の故地にあたる。一乗院は、康平五年(一〇六二)、治承四年(一一八〇)、仁治二年(一二四二)、寛永十九年(一六四二)に焼亡したことが知られている。これまでの調査で、建長二年(一二五

〇)再建の寝殿と慶安三年(一六五〇)再建の宸殿をはじめ数時期の遺構を確認している。今回の調査は、奈良地方・家庭・簡易裁判所庁舎建て替えに伴うもので、調査面積は約九〇〇㎡である。

調査の結果、古代以降現代までの遺構を検出した。建長年間以前の遺構は少ないが、注目される遺構としては、興福寺創建瓦を含む溝状土坑SK八四八五、上層の埋土に一〇世紀後半の遺物を含む南北溝SD八四六八、一一世紀後半頃の土器と大量の炭を含み、康平年間の焼亡に伴う可能性が高い土坑SK八二四八がある。また、寛永年間の焼亡に伴い廃棄された大量の遺物からは、江戸時代初頭における、法親王入寺に伴う一乗院の隆盛の様がうかがわれる。

今回の調査では、池SG八二三〇の遺水と考えられてきた南東から北西に蛇行しながら続く流路遺構SD七八〇〇が、池の手前で閉塞することが判明した。その一方、水の供給に関わる遺構として泉水SE八四六五を新たに検出した。泉水の埋土には一三世紀頃の土師器が多く含まれていたが、近世の遺物も含まれているので、この遺構は慶安年間再建の宸殿に伴う池と関わるもので、元治元年(一八六四)の「元一乗院橘御殿絵図面」(興福寺所蔵)にみられる泉水の一部と理解できる。木簡はいずれも中世後期のもので、井戸SE八四九〇から一点、井戸SE八四四五から二点、計三点出土した。井戸SE八四九〇は、中世後期の素掘りの井戸で、前述の流路遺構SD七八〇〇の中央に穿たれている。検出面の径一・五m深さ

二・八m以上で、出土した土器の年代は流路遺構SD七八〇〇の埋没時期に近い。なお、この井戸から天秤を担ぐ人物を描いた墨画土器(下図)が出土している。

井戸SE八四四五は、径二・一m深さ三・一mの素掘りの井戸である。井戸底に近い埋土に大量の木質遺物が含まれ、木簡はこの層から出土した。上層の埋土には一六世紀前半頃の土師器皿が投棄されており、井戸の廃絶時期を示すものと思われる。また、内外面に墨痕があり内面には怖い形相の面人が描かれた土器、外面に「御」などと記した墨書土器が数点出土している。なお、井戸SE八四四五が埋められた後、西南に接して新しい井戸SE八四四二が掘られており、この井戸は前述の絵図にも見えている。

8 木簡の釈文・内容

井戸SE八四九〇

(1) ・春日大明神

・春 □ 連

(53)×7×2 081

井戸SE八四四五

(2) □

(103)×(26)×3 081

(3) □

(51)×(7)×3 081

(1)は、上下端折れ、左右は削りで面取り加工が施されている。

同一材と思しき木片がもう一点出土しているが、墨痕は認められず接続しない。木簡の用途は不詳。(2)(3)はともに断片。墨痕は確認できるものの釈読できない。

9 関係文献

奈良文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』三七(二〇〇三年)

同『奈良文化財研究所紀要二〇〇三』(二〇〇三年)

(山本 崇)



土器に描かれた天秤を担ぐ人物



(1)